

保育者の眼差し

——続・担任という視線

矢萩 恭子

子どもと関わる場を幼稚園に得て、「担任」という視線で子どもたちと共に生活を与えて以来、それなりの年月が過ぎた。

わっててくる気持ち、一つひとつを大切に細やかに感受し、それらを自分自身の心で受けとめ表現する喜びと難しさを常に抱えている。

私は、以前本誌でS子という、クラスの中では大変おとなしく、控えめで静かな感じの子どもについて述べた(九十七卷四号)。それぞれが自分な

りに幼稚園での生活を展開できるまでに成長していした年長組のある日にS子が示した行動から、S子の内面で起こっていたことの一端へ自分なりの考えを進め、同時に「担任」という立場が抱え持つてある視線の特徴や、感じたり、経験したことを《見直す》行為の必要性について言及した。

言うまでもなく、担任は、大勢の子どもの変化や成長に同時進行的に立ち合うことになる。集団を相手にしながらも、個々の日常を丁寧に見つめ、変化を変化として、成長を成長として感じ取り、それぞれの子どもと応答を繰り返し、積み重ねる。その中で、常に、「クラス」という人間関係の型を意識しながらも、その型において個々の子どもがそこに慣れ、そこにおいてありのままにそれぞれを表現してくるところで非常に個人的に関係を結び理解を深めようと努力する。考え込んだり、悩んだりしつつも、精一杯生きている子ども

もたちの全存在を認め、ともかくも認め、温かさでぐるみ込むようにして、見守り、励まし、注意し、そして、時には厳しく叱る。

*

担任になりたての頃、それは三歳児のクラスであつたが、降園準備にかかる為に一人ひとりを保育室へ呼び戻そうとして、私はあちこちをそれこそあたふたと駆け回っていた。一人を連れ帰つてくれば、やつと戻つてきていた別のもう一人が出でいつてしまふよ

うなそんな三歳の
楽しいひととき。

それでもようやく
ほとんどの子どもたちを中に入れ、



園庭を見ると、K

が一人、ジヤングルジムのてっぺんに登り、一向

にクラスの動きなどにはおかまないなしに遊んでいた。庭靴に履き替え、Kのところへ私が行き、Kとのやりとりを愉快にも感じながら、連れ戻そうと難儀していると、当時の園長が来て言った。

「あなたにはクラスがあるのでしよう。お行きなさいな。」新米の私がどんなに、手間取り、うろたえ、焦り、まごまごしてやっていようが、私は終始にここにこと無言で、背後からそつと助けてくれていた園長の、この言葉は鮮明に私の心に響いてきた。〈クラス〉の〈担任〉ということを改めて自覚した最初であつたと思う。

数年前、Rという強烈な個性に出会つた。飛び抜けて身体が大きく、行動が粗暴で、非常な甘えん坊だった彼との一年間は、あまたあるクラスの悩みも、成長も、停滞も、涙も、喜びも、感激

も、Rなしには一日とて語れない日々であつた。

Rの行動は、彼がここからそこへただ移動しただけでも、周りの空気を揺さぶり、そばにいる人や物にぶち当たり、心地よく平和に流れていたそれまでの時間と空間を引き裂かずにはおれない程の、エネルギーとパワーを発散していた。当初の彼は、とにかく世界の至る所、自分の思いに満ちていないと気が済まない傾向があり、その思いのとおりに相手や場面を動かしたがるので、何かと周りとの衝突が起こり、一旦ぶつかれば、誰一人として（担任さえも）敵う者のいない腕力で、相手を突き飛ばし、ねじ伏せてしまう。または、思いどおりにいかないと、ひっくり返つて泣き喚く。そこら辺にある物にあたる。自分がその一員となつて集団で進めていくべき、生活の流れ（遊びを切り上げて片付ける、お弁当の準備をする、或いは、行事に楽しく参加する……など）

に従うことを嫌がり、拒む。

今でこそ、激しい行動を示していたRの、安心や平衡や秩序を求めて、渦巻き、吹き上げるR自身の内面の叫び、葛藤を、今でもありありと蘇るあの場面この場面を、冷静に捉えることはできる。しかし、当時の自分には、果たしてそれができていたと言えるかどうか。気持ちがうまく興味のあることに辿りつけたとき、一旦取り組み始めると驚く程の集中力でそこに我を没入するRの美しいまでの姿を見、幼稚園に入りたての小さい組の人たちにそつとアリを差し出してやる意外な一面を知ったとしても、そして、Rには、こうやって大人を翻弄し、信頼と安心の手応えを探りながら、求めていながらうまくいかない友だちとの付き合いを何回でも繰り返し重ねていくことがどうしても必要だと実感したとしても、この保育者を抱え込み、引きつけ、振り回し、離さずにはおか



ない子どもの存在に、担任の私は、押し流されになっていたに違いない。なぜならば、クラスを見渡せば、遊びが見つからず、心細げに助けを必要としている子どももいれば、友だちとの関係につまずき悩んでいる子どももあり、また、Rと同じように、側にいてくれる大人を待ち焦がれている子どももいたからである。他の子どもたちの様子や気持ちが担任である自分の心に飛び込んでくればくるほど、一人の保育者としての力の限界を知らされる。だが一方では、手がかかるからと言つて、こんなにも真剣に保育者との関わりを求めている、この一人の人との『いま』を本気で受

けれどめずして、クラスを子どもたちと一緒に作つていくと「言えるだろうか」という思いもあつた。このクラスはまぎれもなくRも含めてこそこのクラスなのだから。こうして、一人の子どもとクラスのその他の大勢の子どもたちとの間で引き裂かれる状態を抱えながら、或いは、別のところで進行していた他の深刻な問題にも直面しながら、私は「担任」という役割の現実に向き合わされていた。

の予兆……など、保育のさながらにあって、「この感覚は前にも経験したことがある」と思われる事柄が重なるようになつてきた。そして、子どもの自我の成長やアイデンティティの確立に真剣に関わろうとすればするほど、一人ひとりの自我に関わる問題が次々と、或いは、全国の天気分布図のように明滅しては、私の心の中に灯されていく。担任は、その中のどの一つもいい加減にできぬ代わりに、どの一つにのめり込んでしまつても、クラスは成り立つていかない。

一人の子どももとつきあつて いるときも、保育者は保育の場の全体の状況を見て とつて いる。

• • • •

同じよつなことは、クラスが代わり、クラスを構成する一人ひとりが替わっても、大概同じようになめてくる。自分の体力の消耗度こそ違え、Rは、何ら特殊な存在ではなかつたことがこの頃になつて実感される。同じ子どもは一人として存在しないものの、ある特定の場面や状況で示す気味に感じる普遍性や、ある危機の次に訪れる変化持ちの行き詰まりの類似性や、特徴的な行為の意味を感じる普遍性や、ある危機の次に訪れる変化

全体の状況を優先させすぎると、抜けがないよう見回る保育になって、保育に落ち着きがなくなる。逆に、全体の状況を無視して一人の

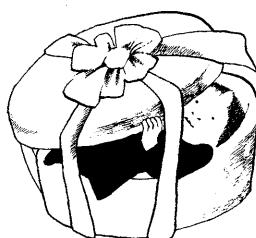
子どもにのめりこむと、関係が他の子どもたちに開かれなくなってしまう。実際の保育はその中間にいる。※

子どもは誰しも特定の大人が継続して温かな配慮をめぐらせた生活を必要としている。クラスは、その規模の大小は別として、担任という一人の人が複数の子どもたちにその配慮の眼を注ぐ場であるから、力の限界は避け難い。私も常日頃、担任とは違ったフリーな立場の保育者や、他のクラスの保育者に助けられ、支えられている。

先の園長のように「お行きなさいな」とそつと肩を押してくれることもあるが、さまざまな状況や経過を配慮して、相手の子どもと担任とのつきあいを継続させるために、他の子どもたちをみてくれる場合もある。或いは、私たちは互いに、保育後の忙しい時間の合間ででも、子どもの話や困つ

てている状態に耳を傾けあうことの大切さを知っている。互いが抱える〈中間〉の微妙さ、難しさ、外側からは計り知れない眼に見えない状況があることを知っている。実際、私は、保育のなかで、数知れず自分の限界を痛感させられてきた。そうやって、自分の限界に立ち合うことで、また新しい自分自身を知ることが可能になる。迷い、悩み、振り返り、考えるそこから、保育者としてのまた新たな一步が始まる。

*



Rとの関わりでは、私も様々なことを経験し、学んだ。そして、様々な危機があつた。Rが分からぬ。負担だ、か

わいいと思えない、という保育者としての危機も経験した。本来ならば、子どもの為に信頼しあうべき母親との葛藤もあった。父親と対話しようとした試みが逆の結果を生んだこともある。他の母親からの批判も受けた。親身に意見を述べてくれているであろう職員の言葉や態度に動搖し、うな垂れることもあった。怪我が続いてしまい、監視や規制に偏った時期もあった。

何かが劇的に変わった訳ではなかつたが、卒園も間近な三学期になつて、Rはすう一つと気持ちが落ち着いてきた。確かに、激しい癲癇やパニックを示さなくなつた。しかし、他方では、同じ行動を余裕をもつて見ていられる自分の姿があつた。なぜか？ それは大変遅れ馳せながら、この私の方がRをようやく信じられるようになつたからではないか。『このままどうなつていくのだろう』という二学期までと違い、本当に心から『R

はきつと分かつてくれる』と思えるようになつた。また、もう一つには、クラス全体が家族のような関係になり、周りの子どもたちの知恵やユーモアにRも私も助けられて、以前ならば緊迫したであろう場面にも笑いが生まれ、Rの方も、行為そのものは叱られることであつても自分のことは見ていてくれる、好きでいてくれるという確かさを手にすることができる、心の深いところで安心し、心穏やかになれたのではないか。そして、心の深いところで通じあえる何かが生まれたとき、それまで必要としていた《表現》は過去のものとなつたのだった。（洗足学園大学附属幼稚園）

◆この文章を、『き沼館理恵子前園長に捧げます。
一九九七年）一五〇ページ